

## イタリアを合わせ鏡にすべき日本農業

今月の特集内容と一部被ってしまいかもしれないが、座談会の「あとがき」という意味も含めてお許し願いたい。それは、今回EIMAでイタリアに行ったことで強く思うところがあつたからだ。

今回のEIMAに参加しての齊藤、波多野両氏の座談会でお二人が口をそろえて言うことは、「プラウの復権」であり、「トラクタ及び作業機大型化への懐疑」だ。

それは除草剤だけでは解決できない雑草の問題、あるいはこれまでの農業の在り方に対する反省からである。とはいえ、トラクタ及び作業機の大型化は進んでいる。それは日本でも同様なことだが、EU諸国の中

では農業経営サイズや使用機械が比較的小さい国であるイタリアでも同じことのようにある。

それとイタリアあるいはEIMAに行つて僕が強く感じたのは、元気で堂々としたイタリア農業の姿だ。EIMAに来る家族連れや若いカップル、それに中学生か高校生と思われる若者たち。日本の農業展示会ではあまり見ないような光景がそこにあつた。農家たちが、そ

して若者たちが農業機械の展示会で明日を夢見ているように僕には見えただのである。そして、汽車の車窓から見たイタリアの農地は農家の丁寧な仕事ぶりが見えた。

イタリアと言えばEUの中では先進7カ国(G7)の一角を占める大国であるにもかかわらず、幾度となく経済・政治危機に陥っている。そんな背景は今回のイタリア行きでも感じる事ができた。僕はEIMAが開催されるボローニヤのホテル代が高いのを嫌って100km以上離れたペローナの民泊に泊まり、ボローニヤに通つた。ある日、切符を買おうと思つたら発車時間が迫つているのに駅員が切符を売ってくれない。地元の人々は平然としているが、外国人たちは焦っている。やがて、駅員が「切符はいいから乗れ」と言う。後でイタリア在住の人に聞いたら金曜日によくこんなヤマネコストライキがあるのだそうだ。同行したK君親子とともに約10ユーロ得したような気分だった。ボローニヤ駅から会場に行くバスでも同じような経験をしたが、そんな体験からイタリアの経済危機の理由もわかるような気がした。でも、農業は元気なのである。以

前にもイタリアのマカロニと小麦生産の現状に関して書いたことがある。大量に小麦を輸入しているが、イタリアの小麦生産は日本で言うような外圧による農業破綻のようなことはない。加工品としてのマカロニその他の麦加工品の輸出が盛んで、農業に大きな影響をもたらしていない。

亡くなった松尾雅彦氏も、スマート・テロワールを語るとき、イタリアに学ぼうと言つていた。それは、イタリアの村々がEUの共通政策や国に依存するより、自らの地域に根差したたくましい農村を作ってきたからだと話していた。農業の元気もそんなところから来ているのかもしれない。

日本の農業を振り返ると、今の日本は「農業ブーム」らしい。農業にAIやICTといった技術が導入されていくことの意味に異論はないが、農業にとって一番肝心な「土」への反省が見過ごされたままITを煽るメディアや農水官僚たちに鼻白むのは僕だけではないだろう。さらに、補助金バラマキの「六次産業化」や水田政策もそうである。

日本人の観光客には一番人気のイタリアだそうだが、その農業・農村のたくましさこそ、それを合わせ鏡にして我が身を見ることが日本の農業に必要なと思つた。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育つた稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。